

# 州立エジプト美術博物館（ミュンヘン）のリニューアル ーヴィッテルスバッハ家のエジプトコレクションー

森 貴史 \*

The Renovation of the State Museum of Egyptian Art in Munich:  
The Egypt Collection of the House of Wittelsbach

Takashi MORI\*

## [Abstract]

The State Museum of Egyptian Art (Staatliches Museum Ägyptischer Kunst) in Munich, which reopened in June 2013 after undergoing renovation, does not have its own building; it is built underground of the University of Television and Film Munich (Hochschule für Fernsehen und Film München).

The history of the museum and the origins of its collection items can be traced back to the Kunstkammer of Duke Albert V of Bavaria (Herzog Albrecht V. von Bayern). Later, through the collections of Charles Theodore, Elector of Bavaria and Palatinate (Kurfürst Karl Theodor) during the latter half of eighteenth century and Ludwig I of Bavaria (Ludwig I., König von Bayern), the Munich collection of ancient Egyptian art rapidly increased. In addition, the museum received donations by individual supporters such as Baron Friedrich Wilhelm von Bissing (Freiherr Friedrich Wilhelm von Bissing), and today operates through subsidies from the Friends of the Egyptian Collection in Munich (Freundkreis der Ägyptischen Sammlung München e.V.).

Duke Maximilian Joseph of Bavaria (Herzog Maximilian Joseph in Bayern) is one of the members of the House of Wittelsbach who contributed to the growth of Munich's Orient Collection. He was called Duke Max (Herzog Max) and is the father of Empress Elisabeth of Austria (known by the affectionate nickname of Sissi), upon whom the heroine of a historical musical would later be based. With only a few attendants, Duke Max made a trip to the Orient in 1838 during which he visited Alexandria, Cairo and Jerusalem, made the acquaintance of Muhammad Ali, and collected many Egyptian excavated artifacts. Today, over half of this collection is kept and publically displayed at the Banz Abbey (Kloster Banz).

Among the characteristics of the Munich Egyptian museum are its hands-on exhibits emphasizing experience. For example, this exhibition approach makes a distinct contrast with that of the Neues Museum in Berlin, a fixture of urban tourism where tourists flock and draw long lines in front of the admissions ticket counter, whose Egyptian Museum boasts exhibits that display a large number of collection items in enormous exhibit spaces.

---

\* 関西大学文学部 (Faculty of Letters, Kansai University, Japan)

## 1 博物館がない！

ウェブで調べたとおりに、バスの停留所を降りて、日本人の感覚ではかなり広大に思われる周囲を見渡しながら、たどり着いた住所の番地には、新奇な長方形の建物が建っていた。これが目的の施設かと建物に近づくと、それはミュンヘン映画放送大学（Hochschule für Fernsehen und Film München）である。目当てのエジプト博物館ではなかった。印刷してきた地図を確認すると、ガーベルスベルガー通り 35 番地のこの場所でまちがいない。バスが運行するこの通りの向こう側には、ミュンヘンの代表的な美術館のひとつ、旧絵画館（Alte Pinakothek）があるのが視認できる。この旧絵画館もエジプト博物館と同様に、バイエルン王ルートヴィヒ 1 世に由来するものではあるのだが。しかし、肝心のエジプト博物館の建物は眼前に存在しないのだ。

業を煮やして、ミュンヘン映画放送大学の学生にたずねてみると、ようやく合点がいった。ミュンヘンのエジプト博物館は建築物ではない。この大学の敷地内の地下にあったのである。しかも、博物館入口は、この横長の大学校舎の敷地内にいる筆者の立ち位置からは正反対の方向にあった（Figs.1, 2）。事前の調査の不充分さを反省しながらも、エジプトという古代文明の博物館があまりにもアヴァンギャルドな構造物になっていることに、新鮮な驚きを禁じ得なかった。

現地で配布されている来館者用パンフレットやウェブサイトのトップページには、「エジプト博物館へようこそ！」（Willkommen im Ägyptischen Museum München!）と記されている<sup>1</sup>、「エジプト博物館」で問題なく伝わるのだが、正式名称は「州立エジプト美術博物館」（Staatliches Museum Ägyptischer Kunst, Gabelsbergerstr. 35, 80333 München）である。

筆者が当該の博物館をおとずれたのは 2015 年 8 月中旬であるが、2 年ほどまえの 2013 年 6 月 13 日にこの場所で新規に開館したばかりであった。それ以前は、王宮（Residenz）の敷地内の王宮庭園（Hofgarten）にあった建物（Residenz München, Hofgartenstraße）がエジプト博物館であって、かつてのエントランスの前方にはオベリスクがシンボルとしてそびえていた（Fig. 3）。



Fig. 1 ミュンヘン映画放送大学の校舎



Fig. 2 エジプト博物館の入口

1 Vgl. <http://www.smaek.de/>



この施設はミュンヘンの地元新聞『アーベントツァイトウング』誌で2013年の芸術部門の目玉として取り上げられて、「館長ジルビア・ショスケとインテリアデザイナーのクリスティアン・ライスレがファラオたちの王国を完全に演出した——それも現代風に」<sup>2</sup>と称賛されたのだが、このリニューアルしてまだまもないエジプト博物館について論じることが本稿の目的である。

当地のエジプト博物館の目新しさは、ミュンヘン映画放送大学の地下空間に造成されていることだけでなく、展示方法もまた最新の「ハンズオン」様式であったのだが、それについては後述する。

## 2 博物館の歴史と収蔵品の由来

ヨーロッパの大規模な博物館の所蔵品がその地を領有していた君主たちのコレクションにたいてい起源を発しているが、ミュンヘンのエジプト博物館も例にもれない。まずは、このエジプト博物館の成立過程とその所蔵品の由来を確認しておこう<sup>3</sup>。ただし、一般にヨーロッパの王侯貴族の名前は類似したものが多く、まぎらわしいことはご海容いただきたい。

記録によると、バイエルン公アルブレヒト5世（Herzog Albrecht V. von Bayern, 1528-79）まで遡及できるようである（Fig. 4）。アルブレヒト5世が自身のクンストカンマーのコレクションのために入手したもののなかに<sup>4</sup>、最初の収蔵品となるエジプト古美術品があったとされている。たとえば、エジプト博物館が所蔵するイシス像はアルブレヒト5世の蒐集に由来するものである<sup>5</sup>（Fig. 5）。

マルティン・ルターによる宗教改革と30年戦争後に統治を開始したアルブレヒト5世であったが、その治世はいまだ宗教的



Fig. 3 かつてのエジプト博物館そばのオベリスク



Fig. 4 アルブレヒト5世

2 Vgl. Sterne des Jahres 2013. In: *Abendzeitung* vom 26. 12. 2013. <http://www.abendzeitung-muenchen.de/inhalt.stern-des-jahres-2013-kunst-museum-aegyptischer-kunst.a6276584-cefe-447f-9719-babb3a0fd72e.html>

3 本節におけるミュンヘンのエジプト博物館とその所蔵品に関する記述の多くは、以下のオフィシャルサイトの記事に依拠した。 <http://www.smaek.de/index.php?id=271>

4 「ヴンダーカンマー」（Wunderkammer、「驚異の部屋」と訳される）、「ラリテーテンシュトゥーブライン」（Raritätenstüblein）とも呼ばれる、人工物や自然物の珍品稀観品の展示室のこと。Vgl. *kunstkammer*. In: *Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm*. S. Hirzel (Leipzig) 1873, Bd. 5, Sp. 2704, wunderkammer. In: a. a. O., 1960, Bd. 14, Ab. II, Sp. 1893.

5 Vgl. Sylvia Schoske (Hrsg.): *Staatliche Sammlung Ägyptischer Kunst München*. Philipp von Zabern (Mainz am Rhein) 1995, S. 11.

かつ政治的混乱が継続していた。その一方で、かれは文化政策を推進し、音楽、絵画、鋳造物、美術工芸品が奨励された結果、ミュンヘンの宮廷文化は繁栄した。アルブレヒト5世は、古銭、カメオ、ブロンズ製工芸品、彫像をイタリアとフランスまで買いつけにいかせた。現在のミュンヘンが所蔵する美術コレクションは、アルブレヒト5世によって収集が開始されたものであって、それらは宮廷図書館や州立図書館、旧絵画館、古銭コレクション、古美術品展示館（Antiquarium）などに収蔵されている<sup>6</sup>。

アルブレヒト5世以降の250年間は、ミュンヘンでのエジプト古美術品蒐集はおこなわれなかった。転機がおとずれるのは18世紀後半の選帝侯カール・テオドル（Kurfürst Karl Theodor, 1724-99）の時代である（Fig. 6）。プファルツ選帝侯としてマンハイムに居城をかまえていたかれは、イタリアで蒐集してきた古美術を展示していたのだが、そのなかにエジプト由来の彫像コレクションがふくまれていた。のちにバイエルン選帝侯も継承したカール・テオドルの古美術コレクションを1803年にマンハイムのアンティークホールからミュンヘンの居城内のクストカンマーへ移送して展示させたのが、カール・テオドルの名跡を継いだバイエルン選帝侯にして初代バイエルン王になったマックス・ヨーゼフ（Max Joseph, 1756-1825）であって（Fig. 7）、さらに1808年には王立古美術品展示館（Königliches Antiquarium）へと保管場所が変更された。

しかしながら、ミュンヘンのエジプト博物館における所蔵品の増大にもっとも寄与したのは、バイエルン王ルートヴィヒ1世（Ludwig I., König von Bayern, 1786-1868）である。現在、ミュンヘンがドイツを代表する芸術の都としての地位を獲得しているのは、かれに依拠するところが大きい（Fig. 8）。というのも、王子時代の1804年に18歳でローマに滞在したおりに、ルートヴィヒ1世はとりわけ古代ローマ、ギリシアの美術を学び、当時の最新であった古典主義の優れた芸術家たちの知己を得ていたのであって、芸術に対する意識は人一倍高かったといえよう。彫刻品展示館（Glyptothek）、絵画館（Pinakothek）はかれが設立したものだが、ルートヴィヒ1世の治世である19世紀中葉は、芸術や美術のコレクションが君主の趣味の涵養のためではなく、市民の教養を高めるための教材や施設として美術史や歴史的知識が利用される時代であったことも知っておくべきだろう<sup>7</sup>。

それゆえ、ルートヴィヒ1世が王子時代から構想していた彫刻品展示館は、古代および現代の彫刻を展示するために建設されたドイツ最初の美術館である一方で、市民の来館が許可されていたのである<sup>8</sup>。

ルートヴィヒ1世はエジプトの古美術についても同様で、のちのエジプト博物館のルーツを形成した人物であるが、王子時代からすでにエジプト古美術品の購入を開始していたという筋金入りのエジプトマニアであった。かれは自身の立案による彫刻品展示館の「エジプトホール」（Ägyptischer Saal）で展示することを構想していた。それゆえ、現在のエジプト博物館の美術館としてのありかたも、ルートヴィヒ1世の蒐集方針に起因している。

6 Vgl. Siegmund Ritter von Riezler: Albrecht V. In: *Allgemeine Deutsche Biographie*. Duncker & Humblot (Leipzig) 1875, Bd. 1, S. 234-237, hier S. 235.

7 Vgl. Karl Theodor von Heigel: Ludwig I. (König von Bayern) In: *Allgemeine Deutsche Biographie*. Duncker & Humblot (Leipzig) 1884, Bd. 19, S. 517-527, hier S. 517, Frank Büttner: Ludwig I. Kunstförderung und Kunstpolitik. In: Alois Schmid, Katharina Weigand (Hrsg.): *Die Herrscher Bayerns. 25 historische Portraits von Tassilo III. bis Ludwig III.* C. H. Beck (München) 2001, S. 311-329, hier S. 315-317.

8 Vgl. Christine Metzger, Franz Marc Frei: *99 × München wie Sie es noch nicht kennen*. Bruckmann (München) 2014, S. 142.





Fig. 5 アルブレヒト 5 世由来の  
イシス像



Fig. 6 プファルツ・バイエルン選帝侯  
カール・テオドール



Fig. 7 初代バイエルン王  
マックス・ヨーゼフ



Fig. 8 ヴィルヘルム・フォン・カウルバッハ、《芸術パトロンとしての  
バイエルン王ルートヴィヒ 1 世》、1848 年

たとえば、かれが最初に獲得した 1815 年の古美術品は、等身大サイズで頭部がハヤブサをかたどった神像であって、ルートヴィヒ 1 世のコレクションのなかでもっとも重要とされるもののひとつである (Fig. 9)。古代にローマへ伝来したこの彫像は、1635 年に再発見されて以来、17 世紀から 18 世紀にかけて隆盛したエジプトブームのシンボルであったが、ルートヴィヒ 1 世の美術エージェントであるヨハン・マルティン・フォン・ヴァーグナー (Johann Martin von Wagner, 1777-1854) の交渉によってイタリアのバルベリーニ家のコレクションから購入したものである。同年 1825 年には、建築家レオ・フォン・クレンツェ (Leo von Klenze, 1784-1864) もエジプト狂いの王子のためにイタリアの枢機卿アレッサンドロ・アルバーニのコレクションから 8 種の大型エジプト古美術群を競落しており、ローマ東方の町ティボリのヴィラ・アドリアーナ由来のローマ式オベリスクやエジプト彫像がふくまれていた。これらはハドリアヌス帝がティボリでのエジプト神の聖殿へ捧げるために造成したという由緒正しい発掘品である (Fig. 10)。

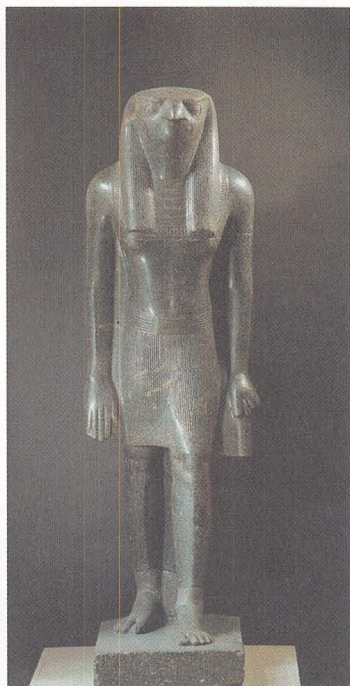


Fig. 9 ルートヴィヒ 1 世が最初に獲得したホルス神像

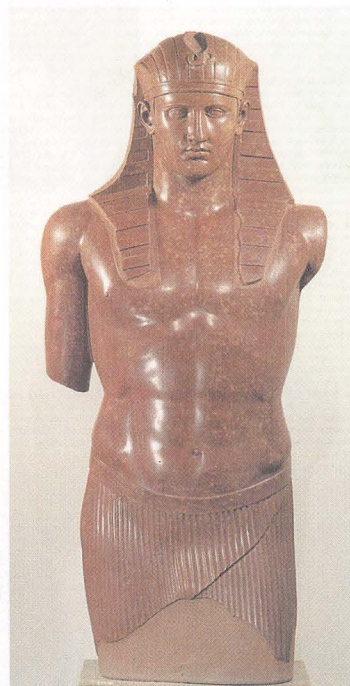


Fig. 10 ティボリのヴィラ・アドリアーナ由来の神像

ルートヴィヒ 1 世の個人的な美術品蒐集とはべつに、バイエルン王立科学アカデミーもエジプトの発掘品を購入していたが、美術品ではなくむしろ棺、石柱、ミイラなどであって、学術的なものに限定されていた。アカデミー所有のエジプト古美術品全体は居城の古美術品展示館に移管されており、1845 年の収蔵品リストによって確認できる。数点の巨大石柱だけが 1830 年に開館した彫刻品展示館に 20 年代末に運び出された。ちなみに、古美術品展示館と彫刻品展示館で公開されたもの以外は、「ルートヴィヒ 1 世王統合コレクション」として 1844 年に王宮庭園の絵画館 (Galeriegebäude) 内に開設された「エジプトホール」に収蔵されていた。



ルートヴィヒ 1 世がその「統合コレクション」のために入手したエジプト古美術品のなかで最後にして最も重要な所蔵品は、ナイル川流域にあった古代エチオピア王国の首都メロエの女王に帰属する金製の装飾品群である。医者で冒険家のジュゼッペ・フェリーニが 1834 年に現在のスーダン北部のアマニ・シャヘート女王のピラミッドで発掘したものだが、その一部をルートヴィヒ 1 世が 1839 年に買い取ったのである。だが、当時はこの装飾品シリーズの真正がいまだ疑われていた。

そこへ登場したのが、ドイツ近代エジプト学の創始者カール・リヒャルト・レプジウス（Karl Richard Lepsius, 1810-84）である（Fig. 11）。レプジウスはベルリンのエジプト博物館の創設に大きく寄与したエジプト学者だが、みずからが主導するエジプト探検の準備のために、ロンドンに滞在していた。かれはこの時期にはロンドンにあったメロエの女王の発掘品を鑑定できた。その 2 年後にレプジウス自身がメロエに逗留し、最初の発掘者フェリーニによる情報の真偽を確認すると、かれは現地からベルリンに至急便を送り、プロイセン王のフリードリヒ・ヴィルヘルム 4 世に残りの金製装飾品の火急なる購入を推奨し、この提案は聞き入れられた。それゆえ、ルートヴィヒ 1 世の決断の正当性がはからずもプロイセン王国によって証明されるという事態になったのである。

前述したように、ドイツ近代エジプト学の祖といわれているレプジウスはベルリンを代表するエジプト学者であったが、ミュンヘンにも高名なエジプト学者がいなかったわけではない。レプジウスよりも 60 年ほどのちの生まれとなるが、フリードリヒ・ヴィルヘルム・フォン・ビッシング男爵（Freiherr Friedrich Wilhelm von Bissing, 1873-1956）である（Fig. 12）。

ルートヴィヒ 1 世亡きあと、ミュンヘンがエジプト古美術品獲得に躍起となった時代はひとまず終わりを告げた。その後 40 年間は陶片やパピルスなどの発掘品のみが新しく入手される時期が継続していたが、20 世紀初頭になると、個人的な支援者たちの参与によって、状況が変化する。かれらのなかでもとりわけ重要な人物として名をあげられるのが、ビッシング男爵なのである。

かれは 1906 年から 1920 年までミュンヘン・ルートヴィヒ・マクシミリアン大学（ミュンヘン大学）でエジプト学の客員教授（講座はもたないが、学問的業績によって講義を委嘱された大学教授の名誉称号）に、そのうち 2 年間はエジプト学正教授に任命された。

考古学者としてのビッシング男爵は、私財を投じ、自身がおこなうエジプトでの発掘だけではなく、ほかの発掘事業をも支援した。それゆえ、当時適用されていた発掘品管理規定によって、発掘された古美術品の一部がビッシング男爵に帰属するものとなった。すでに生前から、かれは彫刻品展示館の「エジプトホール」にエジプト古美術の大規模な贈与をおこなっており、それまではあまり発掘されなかった古王国時代のレリーフの数多くがビッシング男爵の寄贈品であった。

1976 年の開館以来、現在もエジプト博物館は価値あるエジプト由来の古美術品を獲得してきたが、それらはすべて、「卓越した美をそなえた作品を獲得する」というルートヴィヒ 1 世のコンセプトを遵守しておこなわれているのを勘案すれば、ルートヴィヒ 1 世こそがエジプト博物館の始祖であるといえるだろうし、

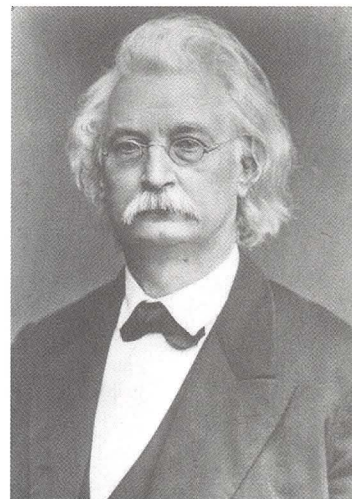


Fig. 11 ドイツ近代エジプト学の創始者カール・リヒャルト・レプジウス



Fig. 12 フリードリヒ・ヴィルヘルム・フォン・ビッシング男爵



おそらくはかれが構想した彫刻品展示館、新旧絵画館に関しても、同等の榮譽に浴することが許されるはずである。

現在、ミュンヘンの州立エジプト美術博物館は、1976年に設立された社団法人エジプトコレクション友の会（Freundkreis der Ägyptischen Sammlung München e.V.）の助成によって運営されている。この社団法人はミュンヘンの同様の団体のなかでは1000人以上の会員を有する最大規模を誇っている<sup>9</sup>。

ところで、エジプト博物館は上部バイエルンのゼーフェルト宮殿を分館として2000年から2009年まで特別展を開催した（Fig. 13）。常設展がおこなわれる本館が王宮内にあった時代に、展示スペースの不足を補完するという役割である。リニューアルされたエジプト博物館に先駆けて、大人と子どもがエジプト文学を楽しめるほか、子どもが絵を描いたり、遊戯ができるような特別室も用意されていた<sup>10</sup>。



Fig. 13 ゼーフェルト宮殿

### 3 バイエルン公マクシミリアン・ヨーゼフのオリエント旅行

バイエルンを統治する支配者の意向によって、ミュンヘンのエジプト博物館の歴史とその所蔵品が増大してきたのであったが、この都市でのエジプト古美術品蒐集やエジプト学の発展に大きく寄与したヴィッテルスバッハ家の人間がいる。バイエルン公マクシミリアン・ヨーゼフ（Herzog Maximilian Joseph in Bayern, 1808-1888）である。「マックス公」（Herzog Max）という愛称で呼ばれたかれは、その祖父ヴィルヘルム（Wilhelm in Bayern, 1752-1837）の代の1799年にヴィッテルスバッハ家に創設されたバイエルン公爵家の3代目当主であった<sup>11</sup>（Fig. 14）。



Fig. 14 マックス公と呼ばれたバイエルン公マクシミリアン・ヨーゼフ

9 Vgl. Schoske, 1995, S. 126.

10 Vgl. <http://www.smaek.de/index.php?id=368>

11 Vgl. Hans-Michael Kröner: *Die Wittelsbacher. Vom Mittelalter bis zur Gegenwart*. C. H. Beck (München) 2009, S. 80-81.

マックス公は軍事や政治での出世に興味がなかったかわりに、ミュンヘンのルートヴィヒ通りにあるかれの宮殿では、芝居、農家の結婚式、コンサート、自身の馬術による障害物競走をふくめたサーカス公演などが開催されて、ミュンヘンのビーダーマイヤー期の社交界の中心であった。ツィター（オーストリアや南ドイツ地方に伝わる撥弦楽器の一種）をみずから演奏し、作詞作曲をこなすほか、上部バイエルンの民謡集を編集したり、方言文学の育成につとめた<sup>12</sup>。しかしながら、マックス公はただの道楽貴族ではなかった。旅行好きのかれは生涯で何度も外国旅行を経験したが、1838年1月下旬に出発し、同年9月中旬にミュンヘンへ帰還するまでのオリエント旅行では、アレクサンドリア、カイロ、エルサレムまでおとずれており<sup>13</sup>、その遠大な知的好奇心を自身で充足させる稀有な行動力も兼備していたのである。

マックス公は子宝にめぐまれたが、子どもたちのなかでよく知られているのは、エリザベート・アマーリエ・オイゲニー（Elisabeth Amalie Eugenie, 1837-98）で、オーストリア皇帝のフランツ・ヨーゼフに嫁いだ（Fig. 15）。「シスイ」（Sisi）の愛称で親しまれていた彼女は、1898年9月10日にジュネーブのレマン湖畔でイタリア人の自称無政府主義者ルイジ・ルキーニの凶刃によって命を奪われるという悲劇的な最期を迎えたが<sup>14</sup>、ルートヴィヒ2世とならんで、ヴィッテルスバッハ家の一族では、もっとも著名な人物であるだろう。

シスイの波乱万丈の生涯は、脚本・歌詞ミヒャエル・クンツェ、音楽ジルベスター・リーヴァイ、演出ハリー・クプファーによるミュージカル作品『エリザベート』（Elisabeth）で描かれている。このミュージカルは1992年にオーストリアのアン・デア・ウィーン劇場での初演以来、日本では1996年の宝塚歌劇団雪組の初演、東宝でも2000年6月の初演以降、何度も再演されている人気作品である<sup>15</sup>。

シスイの父親であるマックス公とそのオリエント探検は日本ではあまり知られていないであろうから、以下で少し詳しく紹介してみたい。ちなみに、このシスイが誕生したのは1837年12月のクリスマスイヴだが、その後ひと月も経過しない1838年1月20日に、マックス公はわずかな随行者だけでオリエント旅行に出発している<sup>16</sup>。



Fig. 15 シスイという愛称のエリザベート・アマーリエ・オイゲニー

12 Vgl. a. a. O., S. 84-85.

13 Vgl. Isabel Grimm-Stadelmann, Alfred Grimm: Weiß und Blau wie der Nil. Die Orientreise von Herzog Maximilian in Bayern und seine Orientalische Sammlung. In: dieselben: *Eine Zitherpartie auf dem Nil. Die Orientreise von Herzog Maximilian in Bayern und seine Orientalische Sammlung*. Museum Kloster Banz (Bad Staffelstein) 2009, S. 9-80, hier S. 30-35, 38-40, 45-46, Hyacinth Holland: Maximilian (Herzog in Bayern). In: *Allgemeine Deutsche Biographie*. Duncker & Humblot (Leipzig) 1906, Bd. 52, S. 248-270. なお、本稿のマックス公に関する記述は上記2種の文献に多くを依拠した。

14 マルタ・シャート（西川賢一訳）、『皇妃エリザベートの生涯』、集英社文庫、2000年、160-164頁参照。

15 渡辺諒、『〈エリザベート〉読本 ウィーンから日本へ』、青弓社、2010年、12、27-28、104、127-128頁参照。

16 Vgl. Holland, 1906, S. 262.



しかし、それ以前にマックス公はこの旅行のための準備を着実に進めていた。ミュンヘン在住の医者にして博物学者、自然哲学者のゴットヒルフ・ハインリヒ・シューベルトを助言者として側近にしていた。シューベルトは 1836 年から 37 年までパレスチナで科学探検をおこなっており、マックス公の旅行計画や組織づくりに協力した。くわえて、マックス公は当時最新のオリент旅行記を研究していた。かれが読んだ旅行記は、1834 年から 1837 年に地中海沿岸諸国、アフリカ、エジプトを旅行した造園家としても知られるヘルマン・フォン・ピュックラー＝ムスカウ侯や、1831 年にエルサレムへ巡礼したトラピスト会司祭マリア・ジョセフ・フォン・ゲランプの旅行記、ならびにエジプト現地で 2 度の調査をしたヒエログリフ解読者ジャン＝フランソワ・シャンポリオンの書簡集『エジプトとヌビアからの手紙』である。とりわけ、ピュックラー＝ムスカウ侯とゲランプの旅行記をマックス公はオリентに携行していた<sup>17</sup>。

マクシミリアン公のオリент旅行の同行者について記しておきたい。フリードリヒ・カール・フォン・ブゼークとカール・テオドール・フォン・ブゼークの兄弟はカトリック騎士修道会マルタ騎士団の騎士であるが、後者はとりわけ線描画家にして石版画家でもあった。マックス公はブゼーク兄弟とこののち何度もヨーロッパ諸国を旅することになるのだが、かれらとは友情のみならず、一種の旅行チームといった趣向であった。1841 年には、公はみずから作曲した《兄弟たち》というピアノ曲をふたりに捧げている。

画家として随伴したもうひとりの人物が宮廷画家のハインリヒ・フォン・マイヤーである。かれが残した絵画は、マックス公の旅行記に一部が収録されたほか、2 冊の作品集として出版された。マイヤーの絵画はカール・テオドール・フォン・ブゼークの作品とおなじく、マックス公のオリент旅行のようすを伝える役目を果たした。ほかの同行者として、ギリシア滞在経験があった王立バイエルン新鋭連隊大尉のテオドール・ヒューグラー、王立バイエルン財務局長、侍従長、副官にしてマックス公付随の「騎士」のゼバスティアン・ルートヴィヒ・フォン・ホイスラー、公の侍医エルンスト・バイヤー博士の名があげられるが、バイヤー博士は残念ながら、旅の終盤にナザレでペストによって落命した。もうひとりは、公お気に入りのツイターの宮廷奏者ヨハン・ペッツマイヤーで、その演奏でマックス公の旅の無聊を慰めた。

マックス公のオリент旅行同行者には、音楽家ペッツマイヤーをのぞくと、宮廷つきの軍人や実務家たちにくわえて、カール・テオドール・フォン・ブゼークとハインリヒ・フォン・マイヤーという画家がふたり参加していることは注目に値するだろう。

19 世紀になって、オリент旅行は一気に隆盛をきわめた。ナポレオンのエジプト遠征に同行した学者グループによって収集されたシステマティックな学術的成果が 1809 年から 1822 年まで出版されたことは、エジプト学の嚆矢とされた。ナポレオンがそのエジプト遠征に画家、技術者、植物学者、地理学者、数学者、歴史学者などの 160 人以上の学者グループを同行させたのとおなじく<sup>18</sup>、パレスチナで科学探検を遂行した博物学者ゴットヒルフ・ハインリヒ・シューベルトから助言を得ていたマックス公もまた、インテリの貴族や軍人とともに画家を同行させることによって、自身のオリент旅行をデータとして記録する意図をもっていたことが推察されるのである。

ところで、現代の文化財保護の観点では問題となるような行為を、マックス公はオリент旅行での途上で数度おこなっている。すなわち、かれ自身の名を現地の名所で刻印する行為である。1838 年 3 月 28 日にナイルの第 2 急端で、翌日 29 日にはアブ・シンベル大神殿の正面側と、ラメセス 2 世の巨像群の 1 体で

17 Vgl. Grimm-Stadelmann, Grimm, 2009, S. 13-16.

18 シャロン・ワックスマン（櫻井英里子訳）、『奪われた古代の宝をめぐる争い』、PHP 研究所、2011 年、87-88 頁参照。



ある巨大なファラオ像の巻き軸装飾下部に署名が刻印されている<sup>19</sup>。

興味深いのは、同行した画家ハインリヒ・フォン・マイヤーの絵画の細部にそのときのようなすがすがしい描きこまれていることである。《第2急端（ヌビア）》の左縁にもそれらしき彫り込みがなされていたり、《アブ・シンベル大神殿》にも、砂漠の砂で半分覆われたラメセス2世の座像に名前が刻まれているのが看取される<sup>20</sup> (Figs. 16, 17)。

マイヤー自身による記述をみると、その当時のみならず現代にも通じるような、旅先や名所に名前を刻む者の動因が表現されている。「ふたつの大陸間にある分断線のこの地点を、全生涯にわたって記憶に残るような深い感銘を抱くことなしに、越えることはできない。旅行者はほとんどだれもが自身の名をこれらの柱に書くのは、後世の人びとに自分がそこに来たことを知らしめるためである。公爵殿下はおなじくこうした先例に従って、同行者にその至高のお名前をこの由緒ある境界石に彫らせたのである」<sup>21</sup>。

現代ではこのような文化財を損壊させるような行為は、ヨーロッパの王侯貴族であろうと許されはしないだろうが、150年以上もまえの、文化財という概念やその保護という理念が具体的に定義されることのなかった時代であることを認識するまでにとどめておく。

とはいえ、同様の行為で注視しておくべき〈事件〉とも呼べるできごとがもうひとつあるので、これも紹介しておこう。オリエント旅行でマックス公が非常に親しくなった人物のひとりに、当時のエジプト副王ムハンマド・アリー (Muhammad Ali, 1769-1849) がいる。オスマン帝国のアルバニア人非正規雇兵部隊に帰属する軍人であったムハンマド・アリーは、ナポレオンのエジプト占領後の混乱を收拾し、1805年にオスマン帝国エジプト総督に就任する。エジプトの実権を掌握したかれは、各種の近代化や西欧化政策の断行によって近代国家としてのエジプトの基礎をつくった人物である<sup>22</sup> (Fig. 18)。マックス公はムハンマド・アリーとはカイロ滞在中に知己となったのだが、最終的にはマックス公のさらなる旅程のために、広い船内で快適な小舟を3隻用立ててくれるまでの親密な間柄になった<sup>23</sup>。



Fig. 16 マイヤー、《第2急端（ヌビア）》の一部



Fig. 17 マイヤー、《アブ・シンベル大神殿》の一部

19 Vgl. Grimm-Stadelmann, Grimm, 2009, S. 36.

20 Vgl. a. a. O., S. 37.

21 Vgl. a. a. O., S. 38.

22 林佳世子、『興亡の世界史 10 オスマン帝国 500年の平和』、講談社、2008年、346-348頁参照。

23 Vgl. Grimm-Stadelmann, Grimm, 2009, S. 33.

ところが、このムハンマド・アリーがマックス公と同行者のために古代エジプトの墳墓1基を暴き、その内部の副葬品を自由に分配させたのである。オリエント旅行の同行者ヨハン・ペッツマイヤーもこのさいに副葬品であったはずの古美術品を入手しており、現在はミュンヘンのエジプト博物館で所蔵されている。そのひとつが目録番号「ÄS 3012」で (Fig. 19)、以下のような解説が付されている。「ムハンマド・アリーが 1838 年のバイエルン公マックスの旅行のうちに開口させたエジプトの墓から出土、その副葬品をかれと同行者に分配したもの。随行した宮廷演奏家ヨハン・ペッツマイヤーがこの作品をほかの 3 種 (ÄS 3015-16) とともに携行し、大切に保管していた。かれの死後、ヒュアツィント・ホラント博士が確保し、1912 年に民族学博物館に寄贈された。1935 年 5 月から当館に移送された」<sup>24</sup>。

ちなみに、ペッツマイヤー、ホラントに由来するこれらの 4 体の粘土製の像は、いわゆる「ウシャブティ」という副葬用ミイラ型小像であるが<sup>25</sup>、すべてが同一の墓から出土したわけではないようだ。というのも、刻まれた銘には、それぞれ異なる個人名が彫り込まれているからである<sup>26</sup>。

この〈事件〉も、時代による認識の限界ではあるだろうが、現在ではまず生起しえないにちがいない。19 世紀中葉以降にエジプトでの発掘に制限が課される以前の一つ牧歌的な時代のエピソードではあるだろう。

さて、マックス公がオリエント旅行で収集してきた古美術品や発掘品はどこに置かれたのであろうか。かれのオリエントコレクションはまとめてバンベルクの北に位置するバンツ修道院 (Kloster Banz) で保管された (Fig. 20)。現在もバンツ修道院ではマックス公のオリエントコレクションのための展示室がある<sup>27</sup>。1803 年に教会財産が国有化されて以来、空き家となっていたのを、マックス公の祖父で初代バイエルン公となったヴィルヘルム公が夏の居城として購入した経緯があり、マックス公自身も夏にはよく利用していた。それゆえ、バンツ宮殿 (Schloß Banz) とも呼ばれるのである<sup>28</sup>。

バンツ修道院はじつはマックス公関連のオリエントコレクションのみで知られているのではなく、化石のコレクションでも有名である。というのも、化石の蒐集はヴィルヘルム公時代からおこなわれていたからだ。公がバンツ修道院を購入した当時、この地の主任司祭はかつての修道士であったアウグスティン・ガイヤーであった。このガイヤーがバンツ修道院で化石の蒐集をしていた。ヴィルヘルム公がバンツ修道院で夏の数ヵ月を過ごすときには、枢密顧問官カール・テオドールが同行していたのだが、ガイヤーは自身の化石コレクションをテオドールにみせたい。それから、ガイヤーとテオドールによる化石蒐集が開始されて、1814 年から 4 年間つづいた。そして、1828 年 9 月にテオドールが自身のコレクションをバンツ修道院の所有者に寄贈し、翌年にはガイヤーの化石コレクションも譲渡されて、コレクションはいちおうの完成をみるのである<sup>29</sup>。

カール・テオドールはその化石コレクションとともに、マックス公のオリエントコレクションもバンツ修道院のなかで保管していた。マックス公は自身のコレクションと祖父のヴィルヘルム公のコレクションを統合していたようで、ヴィルヘルム公由来のプレシオサウルスの脊椎骨とされているものもふくまれている (Fig. 21)。オリエントコレクションは、1839 年から 57 年まで東洋風の天井画で装飾された「エジプトルー

24 Vgl. a. a. O., S. 42-44.

25 『世界大百科事典』(改訂新版)、平凡社、2007 年、第 3 巻、240 頁参照。

26 Vgl. Grimm-Stadelmann, Grimm, 2009, S. 43.

27 Vgl. a. a. O., S. 40.

28 Vgl. a. a. O., S. 59.

29 Vgl. a. a. O., S. 59.



ム」で展示されていた。1930年からミイラはべつの場所で展示されるようになったが、マックス公のオリエントコレクションは1942年まで保存されつづけた。1986年から87年までは修道院内の別室に移管されたが、2009年からは新しく発見された展示品と目録とともに展示方法も一新されて、オリジナルの家具と合わせて、マックス公時代の展示の再現を試みている<sup>30</sup>。

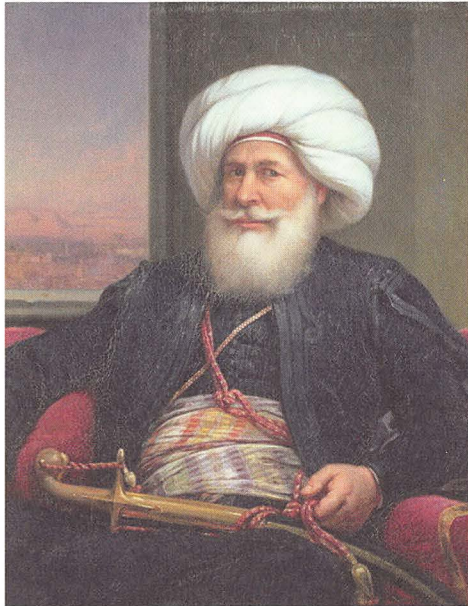


Fig. 18 ムハンマド・アリー

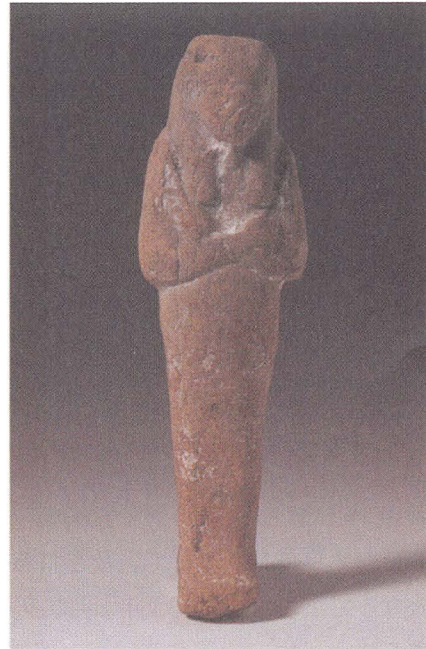


Fig. 19 ペッツマイヤー由来のウシャブティ (ÄS 3012)



Fig. 20 バンツ修道院

30 Vgl. a. a. O., S. 60, 62-63.



マックス公のオリエントコレクションは、現在の学術的な展示のしかたではなく、どちらかといえばクンストカンマーに類似した展示だったようで、かつての展示室のようすからも、それが理解できる (Fig. 22)。近年、そうした 16 世紀に流行した「驚異の部屋」への関心が高まり、バイエルン州でもランツフートのトラウスニッツ城で、クンストカンマーが 2004 年に再興されて、博物館として開館している<sup>31</sup>。



Fig. 21 プレシオサウルスの脊椎骨 (?)

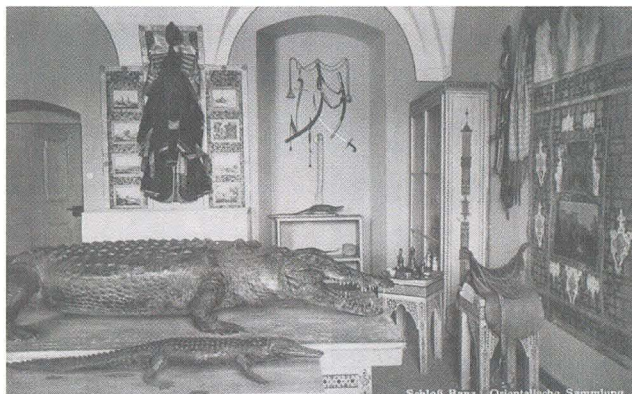


Fig. 22 パンツ修道院内のかつてのオリエントコレクション展示室

マックス公のオリエント旅行で言及されるのは、かれが 5 人の黒人奴隷をミュンヘンに連れ帰ったことである。旅立ってまもない 1838 年 2 月にアレクサンドリアで数日滞在したさいに、奴隷市場を見物におとずれた。さらにカイロでの滞在時にも、奴隷市場に足を運び、マックス公ははじめて奴隷を数名購入した。上部エジプトの都市ケナでも買い取り、最終的には 10 代の黒人少年 5 人を購入したのである。マックス公はかれらに聖母教会 (Frauenkirche) で受洗させて、ヨーロッパ名をあたえたほか、オリエント旅行の同行者を里親にして、教育をほどこした<sup>32</sup>。

5 人の黒人少年たちの教師になったのは、法律家、王子つき家庭教師、言語研究者の肩書きを有するカール・トゥチェック (1815-43) である。トゥチェックはヌビア地方出身のかれらからの情報をもとに、エチオピアのオロモ語の最初の辞書と文法書を上梓した<sup>33</sup>。これもマックス公のオリエント旅行によってもたらされた成果のひとつであるだろう。

かれら 5 人の黒人奴隷のその後についても、いくらか伝承が残っている。そのひとりで「テオドル」という名の少年は、ミュンヘンで 3 年暮らしたのちに病死してしまった。かれはミュンヘンで最古の旧南墓地に葬られた。かれの墓所の記録は 1899 年までは確認されているが、現在ではもはやかれの墓の痕跡も残っていない<sup>34</sup>。あともうひとりの黒人奴隷をめぐる興味深いエピソードを紹介することで、マックス公の節を締めくくりにする。

31 Vgl. a. a. O., S. 61. なお、トラウスニッツ城のクンストカンマーについては、北原 博、「ランツフート ヴィッテルスバッハ家と再現される驚異の部屋」、森 貴史 (編)、『ドイツ王侯コレクションの文化史 禁断の知とモノの世界』、勉誠出版、2015 年所収、307-336 頁参照。

32 Vgl. Grimm-Stadelmann, Grimm, 2009, S. 46-48. しかし、ヒュアツィント・ホラントによる『一般ドイツ人名事典』の記事では、マックス公が連れ帰った黒人奴隷の人数は 4 人である。Vgl. Holland, 1906, S. 269-270.

33 Grimm-Stadelmann, Grimm, 2009, S. 51.

34 Vgl. a. a. O., S. 56-57.

地元の方言で〈ビラート〉(Billat)または「ピラーン」(Pran)という名で言及されるかれは、義勇兵としてバイエルン軍に入隊し、ディリンゲン〔ドナウ河畔の都市〕の軽騎兵連隊の曹長であったが、ある日突然、逐電してしまった。時は流れて、1870年の普仏戦争のさなか、3人のバイエルン兵がフランス軍の捕虜となり、アルジェ〔アルジェリアの首都〕に送還される予定になっていた。ある日、フランス軍の黒人騎兵が真正のミュンヘン方言でかれらに話しかけてきたので、バイエルン兵たちは少なからず驚いた。トルコ帽とビュルヌー（アラビア人男子が着用するマント）を身につけたこの誇り高い黒人はかれらを解放し、特別な依頼とともに帰国するように告げた。その依頼に従って、かれらは故郷に帰還するとすぐにルートヴィヒ通りにあるマックス公の宮殿へおもむいて、殿下にかれからの深き親愛なる感謝の念をことづてでお伝えしたのだった。あの黒人奴隷は自分のやりかたで高位の者に出世していたのだ<sup>35</sup>。

#### 4 知覚で学ぶ博物館

ミュンヘンのエジプト博物館の展示は、人文科学系の研究に従事する著者にとって非常に新鮮であった。ドイツ語と英語の音声ガイドのほか、タブレットのタッチスクリーンパネルの表面をスライドさせることで、展示品の解説やエジプトの歴史などが学べるようになっていたり、展示品の石製彫刻のレプリカを手にとって石の触感を感じたり、サイズの小さな出土品を3Dの立体投影で細部を確認したりと、ただ展示品を観察し、解説を読むだけではなく、体験型の展示になっている（Fig. 23）。いわゆる「ハンズオン」(hands-on)という展示方法が採用されていた。

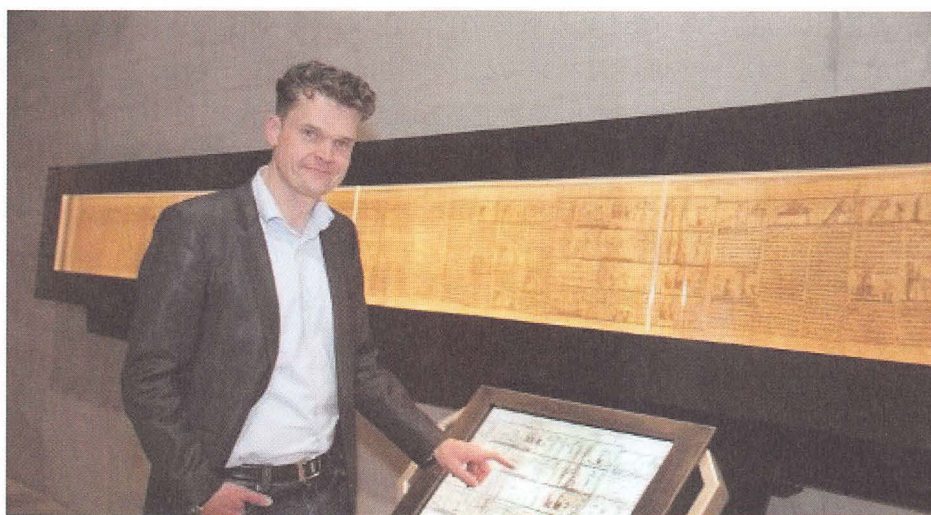


Fig. 23 ミュンヘンのエジプト博物館内でのインテリアデザイナーのクリスティアン・ライスレ

35 Holland, 1906, S. 270.



ハンズオンとは、体験学習を意味する教育用語で、参加体験、インタラクティブ体験、実習、実験、体感といった身体を使用することによる学習補助教育法のことである<sup>36</sup>。しかしながら、ハンズオンといっても、ただ触覚による体験学習といった単純な発想ではなく、「マインズオン」(minds-on)という、来館者みずから学ぶことに重点を置く構成主義的な展示との結合が発想の基幹に置かれている。ここでの構成主義とは、学習者たちがそれぞれの異なる理解をみずから構築するようなやりかたで教育すべきである、またはかれらのなかの既存の概念を前提として授業を組み立てる必要があるという学習・教授理論である。構成主義的学習における博物館展示とは、伝達されるものではなく、意味を見出すものだという博物館展示論であって、1990年ごろから台頭してきた展示手法である。このばあい、来館者は主体的であり、主体的な来館者による表現が重要視されるため、展示資料は来館者の思考を促進するのが主要な役目を果たす対象であり、来館者が新たな問いを発見したり、みずからの表現をおこなうことまでが視野に入っている<sup>37</sup>。

筆者がミュンヘンのエジプト博物館をおとずれたのは8月の平日であったので、来館者もわずかで家族連れはひと組しか眼にしなかったが、兄弟らしい子どもたちは興味深くタッチパネルを触っていた。近年、多くの博物館がこのハンズオン方式を取り入れつつあるのは国際的傾向であって、子どもの感性教育にも適応しているようだ。たとえば、染川香澄と吹田恭子によると、ハンズオンに対応した海外の博物館は18館ほど列挙される<sup>38</sup>。日本でも、東京都台東区上野の国立科学博物館の地球館は2015年7月中旬にリニューアル開館したばかりであるが、アンモナイトの化石のレプリカに触れることが可能であったり、簡単な実験を館内の設備で体験できたりと、ハンズオンにもとづく工夫をこらした展示方法で特徴づけられていた。

このハンズオン展示がミュンヘンのエジプト博物館においてどれほど効果的であるのかは、筆者には判断しかねるのであるが、少なくとも、ベルリンのエジプト博物館と比較することでいくばくかの示唆は可能であると思われる。

ベルリンの新博物館(Neues Museum)内にあるエジプト博物館もまた、その建物が第2次世界大戦で被災し、戦後ほぼ放置に近い状態であったものが戦後70年後にようやく改修されて、2009年に新規に開館したばかりであるが(Fig. 24)、その展示はハンズオンを最初から意識していないという認識である。館内は非常に広大にして、建物そのものが歴史的建築物であるゆえに、展示物とはべつに、内部空間の各所が来館者の見どころにもなっている(Fig. 25)。

また、展示品はちゃんと整理されて、解説あるいは最低限のデータがきちんと掲示されているものの、世界的に有名なネフェルティティの胸像をはじめとして、その膨大な展示の物量そのものに圧倒されてしまう。あたりまえのことであるが、それらにはいっさい触れることが禁止されており、ハンズオンや構成主義的展示論とは一線を画しているのはまちがいないだろう。

36 平井康之ほか、『知覚を刺激するミュージアム 見て、触って、感じる博物館のつくりかた』、学芸出版社、2014年、28頁参照。しかしながら、「触覚」による体験学習もそれほど単純ではないようだ。たとえば、国立民族学博物館でのハンズオン展示は、触感によるイメージーションと思考を喚起する「じっくりさわる」、キャプションと解説を読む視覚と資料の触感によって資料をめぐる状況や環境を考える「見てさわる」、視覚や聴覚をあえて排し、ただ触感のみで資料を把握する「見ないでさわる」というように、身体に知覚させる3種の展示方法を使い分けることで、資料を鑑賞するといった方針を採用している。同掲書、92-94頁参照。

37 平井康之ほか、2014年、28-30頁参照。

38 染川香澄、吹田恭子、『ハンズ・オンは楽しい 見て、さわって、遊べるこどもの博物館』、工作舎、1996年、228-239頁参照。





Fig. 24 ベルリンの新博物館



Fig. 25 戦災で破壊された新博物館内のエジプト博物館の展示室（1949年ごろ）

大きなカフェレストランとならんで、数カ所のミュージアムショップが設置されているほか、エジプト博物館が入っていた戦前の新博物館の建物やその展示室の写真なども展示されており、ベルリンの戦災やかつての栄華の歴史と復興事業といった側面にも脚光が当たる展示となっていたのも、印象的であった。

押し寄せる観光客が入場券購入のために長蛇の列をつくり、価値ある収蔵品が綺羅星のごとく展示されている巨大な博物館および美術館がさらに隣接する博物館島にあることもあいまって、どちらかといえば、エジプト博物館はベルリンの観光事業としての一面が濃厚に感じられた（もちろん、それが批判されるべき点でないのは前提である）。

これに対して、ミュンヘンのエジプト博物館はその立地もふくめて、どうしても地味な印象とならざるをえない。いくら著名なインテリアデザイナーによる内装がすばらしく、教育的効果が高いとされるハンズオン方式の展示であるとしても、来館者がいなければ、博物館の存在意義や運営にも問題が生じるだろう。くわえて、ミュンヘンにやってきた観光客がエジプト博物館周辺をたずねるとすれば、ガーベルスベルガー通りをはさんで反対側にある旧絵画館のほうに軍配が上がるのではないか。

博物館そのものに関する資料という点についても、ベルリンのエジプト博物館は歴史についての文献がかなり出版されており、博物館自体による出版点数も多いうえ、それらの書籍も館内の複数のミュージアムショップで購入可能であったのに対して、ミュンヘンのばあいには小さなショップが1店あるのみで、出版物もエジプト一般に関する書籍が多数をしめており、博物館そのものやその歴史を解説する文献は図録以外には、本稿で参照したマックス公のオリエント旅行に関する書籍以外はめぼしいものがなかったと記憶する。

とはいえ、ベルリンとミュンヘンのエジプト博物館の差異については、所蔵品の価値と数量、来館者数、展示方法のありかたをめぐる博物館運営や行政サイドの問題でもあって、ひいては展示品の価値、いわゆる文化財の価値をいかに判断し、いかに維持していくべきかという問題をも包含することになるだろう。とりわけ、エジプト本国から返還を要求されているエジプト出土の文化財のばあい、問題はますます複雑の一途をたどるのである。

だが、2015年8月および10月にシリア中部パルミラにあるローマの遺跡を破壊したイスラム過激派組織「ISIS」（「イスラム国」）のように<sup>39</sup>、みずからが信奉する教義のみを妄信し、ほかの文明や文化の歴史的遺跡をすべて無価値として破壊するという安易な独善主義の陥穽へ無思慮におちいるわけにもいかないだろう。文化財としての博物館所蔵品に関する問題がじつはきわめて多様な領域を広範にまたがった議論に発展することを考量したところで、本稿をひとまず擱筆することにした。

#### 図版出典一覧

Fig. 1 著者撮影

Fig. 2 著者撮影

Fig. 3 [https://de.wikipedia.org/wiki/Staatliches\\_Museum\\_%C3%84gyptischer\\_Kunst](https://de.wikipedia.org/wiki/Staatliches_Museum_%C3%84gyptischer_Kunst)

Fig. 4 [https://de.wikipedia.org/wiki/Albrecht\\_V.\\_\(Bayern\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Albrecht_V._(Bayern))

Fig. 5 Sylvia Schoske (Hrsg.): *Staatliche Sammlung Ägyptischer Kunst München*. Philipp von Zabern (Mainz am Rhein) 1995, S. 11.

Fig. 6 [https://de.wikipedia.org/wiki/Karl\\_Theodor\\_\(Pfalz\\_und\\_Bayern\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Karl_Theodor_(Pfalz_und_Bayern))

Fig. 7 [https://de.wikipedia.org/wiki/Maximilian\\_I.\\_Joseph\\_\(Bayern\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Maximilian_I._Joseph_(Bayern))

Fig. 8 <http://dekluizenaar.mimesis.nl/?p=3681>

Fig. 9 Schoske, 1995, S. 13.

Fig. 10 Schoske, 1995, S. 15.

Fig. 11 [https://de.wikipedia.org/wiki/Karl\\_Richard\\_Lepsius](https://de.wikipedia.org/wiki/Karl_Richard_Lepsius)

Fig. 12 <http://academictree.org/linguistics/peopleinfo.php?pid=60689>

Fig. 13 [https://de.wikipedia.org/wiki/Schloss\\_Seefeld\\_\(Oberbayern\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Schloss_Seefeld_(Oberbayern))

Fig. 14 [https://de.wikipedia.org/wiki/Max\\_Joseph\\_in\\_Bayern](https://de.wikipedia.org/wiki/Max_Joseph_in_Bayern)

Fig. 15 [https://de.wikipedia.org/wiki/Elisabeth\\_von\\_%C3%96sterreich-Ungarn](https://de.wikipedia.org/wiki/Elisabeth_von_%C3%96sterreich-Ungarn)

Fig. 16 Isabel Grimm-Stadelmann, Alfred Grimm: *Eine Zitherpartie auf dem Nil. Die Orientreise von Herzog Maximilian in Bayern und seine Orientalische Sammlung*. Museum Kloster Banz (Bad Staffelstein) 2009, S. 183.

Fig. 17 Grimm-Stadelmann, Grimm, 2009, S. 179.

Fig. 18 [https://de.wikipedia.org/wiki/Muhammad\\_Ali\\_Pascha](https://de.wikipedia.org/wiki/Muhammad_Ali_Pascha)

Fig. 19 Grimm-Stadelmann, Grimm, 2009, S. 42.

Fig. 20 [https://de.wikipedia.org/wiki/Kloster\\_Banz](https://de.wikipedia.org/wiki/Kloster_Banz)

Fig. 21 Grimm-Stadelmann, Grimm, 2009, S. 60.

---

39 「シリアの世界遺産パルミラ遺跡破壊を衛星で確認 国連機関が発表」産経ニュース 2015年8月30日付、および「パルミラの凱旋門爆破〈イスラム国〉また破壊」産経ニュース 2015年10月5日付参照。 <http://www.sankei.com/world/news/150830/wor1508300004-n1.html>、<http://www.sankei.com/world/news/151005/wor1510050017-n1.html>



Fig. 22 Grimm-Stadelmann, Grimm, 2009, S. 61.

Fig. 23 <http://www.abendzeitung-muenchen.de/inhalt.stern-des-jahres-2013-kunst-museum-aegyptischer-kunst.a6276584-cefe-447f-9719-babb3a0fd72e.html>

Fig. 24 [https://de.wikipedia.org/wiki/Neues\\_Museum\\_\(Berlin\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Neues_Museum_(Berlin))

Fig. 25 [https://de.wikipedia.org/wiki/Neues\\_Museum\\_\(Berlin\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Neues_Museum_(Berlin))

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 25 年度～平成 29 年度）」によって行われた。